
幸せを運ぶひと。 ---Happy Carry Girl is Lucky---

時雨刻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せを運ぶひと。 - - Happy Carry Girl i
s L u c k y - - -

【Nコード】

N 4 3 8 2 A

【作者名】

時雨刻

【あらすじ】

サンタクロースは、クリスマスイブの夜の姿。それ以外の日、サンタは皆に幸せを運ぶハッピーキャリーになる

しかくいそら。 - - - S k y I s B l u e . . . - - -

見上げれば空は広く、どこまでも続く。

それが当たり前で、普通の空。

だけど俺が見る空は、いつだって四角く区切られているんだ。

それが俺にとって普通の空だから。

しかくいそら。 - - - S k y I s B l u e . . . - - -

いきなり、目の前に現れた少女を見て、堅は特に驚くわけでもなく、むしろ最初からわかっていたとでもいうように声をかけた。

「確か、前も来たよな。えつと……誰だっけ？」

「……前に君のところに現れたのは君を励まそうとしたから。……無駄だったみたいだから、消えたのだけれど……たぶん、そう……無駄なことなんて何もないってこと、気がついていなかった。ごめんなさい。今日は、仕事で来たの。君のところに訪れるけどが私の仕事だから」

「けつたいな仕事だな……。ま、いいけどさ。つーかお前の言うてる意味がよくわかんねえ。誰なんだって聞いてんだけど、俺」

「名乗る名前が、私にはないの……だって、必要のないものだから。名乗る必要もないし、聞かれる必要もない。……敢えて言うのなら、サンタクロース。でもそれはクリスマスイブの話。その日以外は、私達はこうして誰かを訪れるのが仕事。こちらが本業なの。でも、

そんなことはどうでもいいの。だって私は 幸運だから。君に訪れた幸運。それだけは確か」

淡々と、透き通った声で少女は答える。

いきなり入ってきて、ふざけたことを言うもんだと、笑いたくなくなった。怒るわけでもなく自分の不運を嘆くわけでもなく、ただ笑いたくなった。

自分に訪れた幸運などと。

あるはずがないのに。

幸運が、訪れるはずがない。

ましてや、人の姿で。

幸運に、形があるとして、人の姿なのだとは想像すらしたことがない。

嘘にしては、あまりに滑稽で。

真実にしても、あまりに幻めいている。

ふと口許を緩めて、少女を見つめる。ひどく美しい少女を。

「もうすぐ死にしまう不運な俺をからかいにでも来たってわけか？

サンタクロース…いや、幸運さん、か」

「さあね。君がそう思うならそれでいいし、あるいは本当にそうなのかも。真実なんて誰にもわからないから。ただ、からかい目的だとしても、幸運をもたらすのだとしても、私は君のところに訪れた。これだけは変えがたい真実」

その言葉の意味を考えながら何も言えないでいる堅に、少女は続ける。

淡々と。

「君が不運だと思うから、それがたとえ幸運であっても不運になってしまふの。不幸も、幸せだと思えば幸せなのと同じこと。他人か

ら見て、それが不幸だったとしてもね。でも君が不運だと思うってことは やっぱり、不運なのかもしれない」

「何が言いたいんだよ」

「言ったでしょう？私は君に訪れた幸運だって」

にこりと綺麗に微笑む少女。

「必ずしも死ぬことが不運だとは限らない。君にとって、不幸せなことであってもね。死ななくても、生きていても、不運は訪れる。幸せじゃないって、生きていても感じる人はたくさんいるでしょう？死ぬことが不運じゃないなら、君の不運は何？」

「俺の……」

不運？

わからねえ。

死ぬこと以外に、不運なことがあるのか？

まだまだこれからだってのに。

皆と喋ったりしてさ。

何でだ。

何で俺なんだよ。

考えたこともなかったのに。

自分が死ぬなんてさ。

……死ぬ？

何でだ？

何で死ぬんだ？

何で、俺は 死ななきゃいけない？

「病気……だから……」

堅がぼつりとつぶやいた。風にさらわれて消えてしまいそうに小さ

かったけれど、少女はしっかりとその声をとらえて、にこりと微笑む。

「そう、病気。君は病気だから死んでしまうの。病気になったことが君の不運」

「だって、これは……いや……、だからどうしたんだよ。なつちまったもんはしょうがねえだろ？それに……足掻いたって治るもんじやない。足掻くことなんか、散々やった」

「それ」

少女が一言だけ呟いたのだけれど、何のことを言っているのかわからず堅は話すのをやめてきょとんと少女を見た。

「その諦めの気持ち。……それじゃ、治らないのも無理ないんじゃない？」

「は？」

「気の持ちよう、って言うでしょ？あれって間違ってると思うよ。言霊って言って、言葉には力があるの。言ったことが本当になるっていうのも、そのせい。だから弱音ばかり吐いてると、体も弱っていく」

「だったらどうしろって言うんだよっ！」

堅がはじけたように叫んだけれど、少女は別に驚いた様子もなかった無表情に彼を見つめていた。

「最初は、すぐ元気になるって思ってた。絶対治してやる、って……でも駄目なんだ。体はどんどん弱ってくんだよ！俺がどんなに祈っても……逆らえないんだ……っ！どうしろって言うんだよ……」

「さあ。どうするかを決めるのは、私じゃないから。……決めなきゃいけないのは、君でしょ？」

冷たい返事を落として、少女は真っ直ぐに堅を見た。
魂が抜けてしまったようにただうつむいている堅に、ただね、と言葉を続ける。

「忘れないで。私は幸運。君に訪れたの。君は、どうしたい？」
「……生きたい……」

ぽつり、と。

力無く、弱々しく発された言葉だけれど。
少女は満足そうに微笑んで、堅が何か言うのを待った。

「……生きたいんだ。死ぬとわかっていても、わかっているから、どうしようもなく生きたい。今日が終わって、また明日が来て、学校行つて。皆が普通だつて思つてることを普通にやりたいんだ……つ、でも無理なんだよ……っ」

「だから、諦めちゃ駄目だつて言つてるのに。私は君の何？」

はつとしたように、堅は顔をあげた。わずかな希望を瞳に映して、少女を見つめる。

「俺に訪れた……幸、運……？」

言いながら、堅の顔に光が芽生えた。

少女はそれに応えるようににこりと微笑む。

「そういうこと。信じる信じないは、君の勝手だけど。こつちも仕事だから、君が信じようが信じまいが幸せをあげなくちゃいけないの」

そう言つて、少女は持っていた袋を開いた。

ふわりと、暖かい光が堅を包む。優しい気分になれる気がした。

「かわりに君の悪いところ　病氣をもらつていくね」

窓から目も開けていられないほど風が強く吹いた。その暴風の中、消えることなく声が響く。

「幸運は、いつも君の傍にいる。忘れないで」

不意に風が止んで、堅はそうつと目を開けた。

そこには誰もいなくて。少女の残像さえも残っていなかった。

ただ、体の中が妙に軽くて。

治つたのだと、自分でわかった。

「……いつも傍に、か」

聞こえているのだろうか。

俺の声が。

「ありがとな、幸せを運ぶひと」

堅はそつと、一言呟いた。

そうしたら、堅の頬を風がなでて。

堅は、ゆっくりと目を閉じて、そして笑顔を浮かべ、久々にベッドから降りると窓へ近付いて空を見た。

ベッドの上にいたとき、窓から見る空はいつも四角くて、それが自分にはすべてなのだと思っていた。

雲がばらばらと散りばめられた空は、どこまでも続いていた。

探し物と落とし物。

I a m a l o v e s i c k g i r l .

空が霞んで、吐く息が白い。街はクリスマス・ソングに溢れている。女子高生になって三年目。

つまり三年生の冬を迎えた千流は、色彩に富んだ街とは裏腹な気分
で、道端に落ちてる石を蹴ると溜め息を吐いた。

だって、わかんないんだもん。

進路進路ってさ。

そんなこと、簡単に決まるわけないじゃん。

簡単に決められたら、悩まないっつーの。

探し物と落とし物。

I a m a l o v e s i c k g i r l .

1 .

もう暗くなってもいい時間のはずなのに、街は音と人と光で溢れて
いた。

もしかしたら、昼間よりも賑やかかもしれない、クリスマスイブの
夜。

「なあにがジングルベルだ、ぶあーかつ」

有線のラジオまでもがクリスマス・ソングを流している。その曲を
右から左へと聞き流しながら、千流は店のショウウィンドウに目を
やり、毒づいた。

飾ってあるのは、洋服。何とかって賞をとったデザイナーがデザイ
ンしたやつ。書いてある値段をちらりと見たけど、高校生に手の届

く数字ではもちろんない。

それを見て、千流は更に深い溜め息を吐いた。

「デザイナーねえ……」

内心、憧れているけれど。

高校生にもなれば、憧れと現実とは全く違うものだ、わかっている。だから、口にはしない。

叶わない夢だとわかっていてのに口にするほど空しいことはないから。

眩しい光を反射しているシヨウウィンドウのガラスに額をあてて、もう一度溜め息を吐く。

「溜め息ばつかついていると、幸せが逃げるんだぞ……って……つかなきややつてらんないよ……既に幸せなんかないし……」

「そう思っているのは、君だけじゃない？」

不意に、自分の眩きに返事が帰って来て、千流は顔を上げると振り返った。

自分を見下ろすように一人の少女が浮いていて、千流はほとんど叫び声に近い声を発した。

「ぎゃっ」

「こんばんは。迷える小羊さん」

「……し、喋った……」

空中に浮いている少女は赤いワンピースを着ていて、白くて大きな袋 サンタクロースが持っているようなソレを手に使っていた。膝辺りまであるがっばりとしたブーツを履いて、桃色の長い髪をなびかせながらとても綺麗に笑う。

その姿は、冬にしてはいささか寒そうだったけれど、少女から漏れる雰囲気は温かく、優しいものだった。

「うん、喋るよ。だって私は、君に訪れた幸運だから。……君にしか見えないけどね」

「……は？幸運……？」

「信じなくても、いいけど。ただこれは私の仕事だから、君に伝えなくちゃいけないの。……君の不運」

「あたしの不運？って……そーいうこと、進路に悩む高校生に言うもんじゃないつしょ。ってか見てて寒そうなんだけど。何、あんた誰？」

少女は地面におりたつと、かすかに微笑んで千流を見た。比較的小さな千流と同じくらいの背丈。

むき出しの肩が何だか寒々としていて、見ている千流のほうが身震いをした。

「…人は私のことをサンタクロースと呼ぶけれど……。それはクリスマススイブの話。でも私が誰であろうと、今は君に訪れた幸運だから」

「はいはい。幸運ね。サンタクロース……って、今日イブじゃん」

「プレゼントを配るのは、あくまでも夜のお仕事。皆が幸せになれるように、配るの。その日以外はこつちが本業」

「幸せを運ぶのが？……ってーかあたしそんなに不幸そう？」

「少なくとも、世界で一番不運だって顔はしてると思うけど？」

何の悪気もなくそう言って笑うと、少女は千流の心臓の辺りをトンと指で突いた。

「答えは、いつもこのなか。君に出せない答えは、私にも出せない。」

……はやく、答えを出して。本当の答え。後悔のない、君の真実。後悔に、飲み込まれなくなかったらね」

「何の、話よ？」

「さあね。わからないならそれでもいいけど。覚えていて、幸運は二度来ないってこと」

ふわりと浮いて、少女は高く高く舞い上がった。その姿が見えなくなるほどに。同時に、何か白い物　雪が、地上に降りてきた。

「何に……気付けたのよ」

クリスマスソング。悲しい主題歌。自分の声も、かき消された。

「はあ……何だかなあ……」

校長先生の長つたらしい終業式の挨拶を聞き終えて教室に戻った千流は、自分の席につくと窓の外をただじっと眺めていた。

そりゃあ、デザイナーにはなりたいけど。

たぶん、もう大学とか願書の締切り終わってるだろうしなー。ってゆーか、まだ募集してても行きたいとこ決まってないし。

……まず、大学行かかさえ決めてないんだよね……

はあ……留年しちゃおっかなー。……って、アホかあたし……。

デザイナーねえ。……デザイナー……ねえ。

千流は心の中でぶつぶつ呟きながら机に頭を垂れた。

負のオーラを滲ませている千流のところに、友人が数人やってきて

彼女の頭を叩く。

「ちーるちるっ！何へたれてんのっ？」

「……や、別に……」

「別について言うわりに、凄い鬱な顔してるよー？何か悩みごと？」

「んー……まあ進路についてちよっとねー……」

やる気のなさそうな気の抜けた返事を返した千流に、心配そうな表情を見せて、そっかと呟く。

「でもそれは千流の問題だからねえ。……後悔しないように、悩めるだけ悩みな。……時間、迫ってるけどね」

「うん……」

それはわかってるんだけどね。

だから悩むんだよなー。

何したいんだろ、あたし。

いつものショウウィンドウ。

気がついたら学校の帰りに毎日通っていて、飾られている洋服に目をやっていた。

冬休みに入ったというのに浮かない気分でいるのは千流くらいのものだろう。

「こんにちは」

またあいつかつ！？と思いながら声をかけられて振り返ったが、今度は人だと悟ってほっとする。

綺麗で、人のよさそうな、髪をアップにしてる女の人。

こんにちとは挨拶を返すと、女の方はショウウィンドウの前に突っ立っている千流に近付いて、飾ってある服に目をやった。

「気に入った？」

「え？ええ、まあ、そうみたい……です。気がついたら毎日通っちゃってるし」

「ふふ。服が好き？」

唐突の質問に面食らいながらも、千流は服を見上げて眩しそうに目を細めた。

「はい、たぶん」

「この服ね、私がデザインしたものなのよ」

優しくそう言った女の人を驚いた面持ちで見ても、千流はおずおずと話を切り出した。

「……じゃあ、あなたがデザイナーの……奈緒さんですか？」

「はい、そうです」

おどけて返事を返した奈緒に微笑みを投げると、奈緒も微笑みを投げ返してきた。

「あなたの名前は？」

「千流です。矢島千流」

「そう、千流ちゃん。私のこと知ってるってことは……デザイナーに興味があるの？」

「……はい」

気の乗らない返事と暗い表情が帰ってきて、奈緒は不思議そうに首をかしげ、千流の手を取ると店の中へと引っ張って行った。
暖かい色で統一された店の中には、色んな形や色の服が場所を取り合っていて、しかし互いに相手をひきたてあっていた。

「……凄い」

「どんな人が着てくれるんだろう、どんな人が喜んでくれるんだろう。……そう思ってデザインするのが、デザイナーの仕事よ。千流ちゃんなら、どんな服をデザインする？」

「あたしは、」

目を輝かせながら店の中を見渡して、真っ直ぐに奈緒を見る。
そして、にこりと笑顔を浮かべた。

「着ているだけで幸せが降ってくるんじゃないかって、思えるような服をデザインします」

「そ。じゃあ、頑張らないとね」

奈緒の笑顔をあとに店を出たとき、そこにはあの少女が立っていた。全身桃色と言っても過言ではない格好の少女。手には、何が入っているのかやっぱり大きな袋を持って。

「迷いが、なくなっただんでしょ？」

「うん。あたし、デザイナーになるの。もうグダグダ言わない。卒業したら、この店に自分を売り込みに行くの」

「そう。君の不幸は、迷う心だったの。自分には決めたことが、夢があるのに、選択肢を増やして悩んでいたの。もう、その心は落として来ちゃったみたいだね。でも、かわりに探していたもの見つけたんでしょう？それが君の幸せ」

「まあ……それが幸せかどうかはわかんないけどさ」

「いいえ。きつと幸せ。だって私は、君に訪れた幸運だから」
「そうらしいけどね。あんた、一体何をしてくれんの？」

おどけて肩をすくめた千流に、少女はにっこりと微笑むと袋の口を開いた。

「君の落とし物を、拾って行くの。迷える心を。君がまた拾ってしまわないように」

「それはいいわね」

すう、と袋の中に風が入って行つて。

少女は袋を閉じた。

千流は少女に向かって、明るい声を投げる。

「キャリーって、どう？」

いきなりだったので少女は何のことか分からず首をかしげ、大きな瞳で千流を見つめた。

千流ははにかんで笑いながら、言葉を紡ぐ。

「……名前。ないんでしょ？幸せを運ぶ人だから、キャリー。よくない？」

キャリーと名付けられた少女の表情が、喜々とした。

「有り難う」

「ん？んー、どおいたしましてっ」

キャリーはふわりと宙に浮いた。嬉しそうに笑って。

「それじゃ」

「うん。ありがと、キャリア。…ねえ、その袋の中、落とし物が入ってるんでしょ？重くない？」

「だってこれが私の仕事だから」

「……そつ、か。ま、返したくなったら返してくれていいからさ。たまには迷うことだって必要だろーしね」

千流の言葉に返事をせず、ただ笑顔だけを浮かべて少女は消えた。仕事が終わったからだろうか。

「幸せ、ねえ……案外、近くにあるものなのかも」

冬の空から、白く冷たい贈り物が降り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4382a/>

幸せを運ぶひと。---Happy Carry Girl is Lucky---

2010年10月15日22時48分発行